

ひなゆめファンの止まり木



パレンタイン合同本 2019

目次

(著者名は敬称略)

馬 T0ry0H 鹿

著者…ピーすけ

4

表紙イラスト…ピーすけ
本文挿絵…ピーすけ

火星冒険録 アリスちゃん

著者…ロッキー・ラックーン

13

本書は、「ひなゆめファンの止まり木」における特別企画「バレンタイン合同本2019」に投稿していただいた有志の皆様による作品集です。今回の投稿に際してのテーマは2つ。
・何らかの**食べ物**が登場すること
・常に**アリスちゃん**に見られている**設定**であること

アリスのおでん

著者…雪月

19

公開サイト…ひなゆめファンの止まり木

二等分の花嫁

著者…双剣士

26

<http://soukenshi.net/perch/>

著者あとがき & メッセージ

36

バレンタイン合同本2019の趣旨説明と受付ページ
<http://soukenshi.net/perch/sp/valentine2019/patio.cgi>

編集後記

39

奥付

39

馬 T0ry0H 鹿

著者…ピーすけ

テロップで彩られた殺伐としたニュース。

渋い顔をする有名人に、識者っぽい人が当たり障りのない意見を述べている。

だから何か。と言えば、特に得られるものは無い。

子供には教育に悪そうな番組を垂れ流しながら、アリスは蜜柑の果肉を噛み潰す。口の中一杯に広がる甘酸っぱさは、画面の向こうの悲劇よりもはるかに身近で、ゆえに重要な情報である。

蜜柑と炬燵。この二つこそ即ち世の理なれば、抗う理由は無。

すっかりオレンジ色に染まった指先をぺろりと舐める。小さな口腔から覗く舌は、指の腹から爪の隙間までを味わい尽くすべく、艶めかしい動きで這いまわる。

ちゅぽん。と音を立てて指が引き抜かれる。テレビの光で、唾液に濡れた指先がてらてらと光沢を

得ていた。

行儀が悪いとは思いつつも、どてらの裾で唾液を拭い、ぞんざいに炬燵机に放られていたスマホに手を伸ばす。

「退屈ですわね……」

座ったまま暇をつぶすには娯楽に事欠かない時代である。

発展したネットの世界は最早もう一つの社会に等しい。ぽかんと白痴のように口を開けているだけでも情報は溢れんばかりになだれ込む。真偽入り混じった情報の洪水は正しく人の世ならではであり悪趣味すらも時には親近を覚える人間臭さと成りうる。

「時間を潰すのに、これ以上も、これ以下のツールもありませんわね」

とりわけB級グルメのような独特の味わいを呈しているのは、ネットに無料で公開されている創作作品達である。

有象無象が混沌を成すネットに在りながら、ソーシャルネットが有するある種の閉塞性によって醸成されるテ

ンプレートによるジャンル化は、そのテンプレートの存在そのものが皮肉めいてジョークとしても中々に上質だ。

「なんでも願いがかなうような世界。羨ましいですわ。どうせなら私も事故にあって理想的な世界に転生したいですわ。対価と報酬が余りにも釣り合っていないませんもの。なんて願いが叶うわけ」

——叶った。

速度と荷物の乗った大型トラック。基本的な運動の原理に従って、その大質量の塊は容易く木造住宅の壁を突き破る。アリスは悲鳴を上げることもしなかった。五感は、あくまで脳が処理した過去のデータである。その僅かな遅延の間に、その華奢な体は容赦なく破壊されつくしていた。美しい光沢をした髪も、綺麗な曲面をした広めの額も、シヨートケーキのトッピングのような小さな鼻も、皺ひとつない首も、なだらかな稜線を描く蕾のような肉体も、服とか机とかトラックとかスマホとか、そのほか色々な他の無機物と一緒にたになってただのモノの塊に成り果てていた。

その痛みを知ることなく果てられたのであれば、恐ら

くその容赦ない死こそがアリスに手向けられた神の慈悲に違いなかった。

「——って、理不尽すぎますわー!! なんなんですかなんなんですか!! ワタクシこんな運命を辿るほど悪いことはしていませんわ。確かに昨日は私ではないプリンを食っちゃいましたけれど、ちよつとスレに荒らし染みた書き込みをしちゃったかもしれないけれど、なんなら毎月レスのつかないクソスレを立てたりしてましたけれど、神様なんてただのハゲじゃんとか言ったかもしれませんけれど、たとしてこれで罰が当たるのだとしたら、神様ちよつと容量が少なすぎませんこと!!」

叫んだ。とにかく捲し立てた。

「この一世代前のスマホでも、もう少し色々入りますわよ!! そりゃもう良いとか悪いとか上品とか下品とか関係なく……って、スマホ……?」

アリスの手には、ちよつとベタベタしたスマホが握られている。

見てみれば画面は綺麗だったし、なんならアンテナの表示までバッチリ。

ついでにアリスの体もどこも異常がなく、さらにさらに言うならば、辺りを見渡せばなんか舞台は中世ヨーロッパっぽくて、バロックやらロココやらアールヌーヴォーやらアールデコやら、とにかくイケてそうな要素をこつたまぜにした建物が乱立していて、そのくせ腰にカタナを差した侍っぽい男とか、頭から猫の耳が生えたあざとい見た目の少女とか、綺麗に禿げ上がった頭をしたガチムチオヤジとか……一部を除いて、どうみてもファンタジーですボク達コンニチハって感じのキャラクターが一樣にこちらを怪訝そうな顔で見つめていた。

「あ、把握。コレ異世界転生ですわね」

コホン。と咳払い。第一印象は大事である。

いや、もう先程の奇行を見られている時点で多分色々ダメなのだろうが、焦ってはならない。なにせ異世界転生である。

どうでもいい、何とかなるのが、なろう系。

「皆さま、失礼いたしました。先程は取り乱してしまい申し訳ありません」

どよめく客衆に、アリスはぺこりとお辞儀をして笑顔を取り繕う。

顔のつくりは悪くない。その上子供である。ガキが奇声を発するのはどこでも当たり前である。きつと。

「私の名前はアリスと申します。少々理不尽なことがありますまして、どうか先程の醜態は忘れていただければ幸いです」

「ねえ、君。大丈夫なの？」

猫耳の女性が屈みこんでアリスに目を合わせてくれる。ゆらゆらと揺れる尻尾もまたあざとい。

しかも屈みこんだせいで強調された胸元が――

「大きいですわね……」

すとーん。と何か落ちる様な音が自分の胸のあたりから聞こえた気がした。

簡単にその感情を認めてしまうのが悔しくて、きよとんと首を傾げて呆けている猫女の胸ぐらを鷲掴みにしてやりたい衝動を堪える。

「あ、いえ。実は私どうやら異世界から転生してきたようです、恐らく展開から察しますにこのスマホあたりがキーアイテムではないかとにらんでいるのですが、あっていますでしょうか」

ついで、とスマホを操作してみせる。

と、アリスの予想通りどよめく群衆。明らかな感嘆の息。

……ビンゴですわ。と心の中でアリスはガッツポーズをつくる。

「RIKISHIだ……」「RIKISHIがおいでなすった……」

「ついにこの町にも……」

「リキシ……?」

「ああ、これは失礼しました。私はブシ……ああ、こんな髪型でも一応出家しているのですよ。無いに私と書いて無私です。異人の方には誤解されやすいのですが」

身なりの良い男が、脱帽して深々と頭を下げる。

この男に限った訳ではないが、衣服の仕立てや、髪を整え方は転生前の世界と変わらない。そして何より言葉が通じている。

つまり、文化の感覚も恐らく致命的なまでの差がないと推察できるといふ事である。

「我々の世界には、あなたを含めて何人かそのスマホなる利器を用いて多大なる富をもたらす稀人が訪れるのです。我々にも情報科学の文明はあるのですが、なぜかスマホは操作できず。ゆえに情報を支配できるあなたは事實上この街……いえ、それ以上の規模で尊敬し崇められる立場にあるのです」

「なるほど。それで利器師……と、いうことはこの後の展開としては、私の力を狙う悪党が来るわけですわね」

たぶん髪型はモヒカンで

「ヒヤッハー!!」「こんなガキ一匹、良いカモだぜ」「しかも可愛い顔してらあ。悪かねえぜ」「えっ」「えっ」「えっ……」「へいSiO1。アイツらを丸焦げにしてあげな

さい」「ぐわーっ!!」「アイエエエエ!!」

スマホからふき出す炎が、器用にモヒカンズだけをレアに焼き上げる。

「馬鹿な……スマホから火が出るなんて……」

アリスはキメ顔で嘯く。

「熱量保存の法則……物理学では基礎中の基礎ですわ」

「クソツどんな手品だ。でも全員で掛ければイチコロだぜ」

どうしてこういう雑魚は無謀なのか。理不尽を手品だと思いつむのか、愚かで蛮勇で、故にもっと苛めたくないと理解できないのか。

「そしてこれが質量保存の法則——へい、SiO₂。相対性理論について」

「ぎよえーっーっ!!」

モヒカンたちが増幅された重力に膝をつく。頑丈なやつらである。

「そしてこれが……」

歯を食いしばり、腕を振りかぶるモヒカン。

重力が増したということは、それだけ振り下ろされる拳の威力が増したということでもある。

だがしかし、アリスは軽やかな身のこなしで躲していく。

「統計学。あなたたち程度の行動パターンなんて、簡単に予測できるのですわ」

「だ、だとしても、避けられないように囲んでフクロにすれば……」

「やれやれ、往生際が悪いですわね」

するり、と。モヒカンの拳がアリスの体をすり抜ける。

「トンネル効果、ですわ。お分かりになったかしら？ あ

なた達はどうやっても私に勝てないのよ。私を屈服させたいのであれば、まずは最低限、大統一理論を完成させてから挑んで来なさいな。もっとも科学を極めたただけは」

「く、くそっ……だ、だが所詮は科学の範疇。俺たちには魔法がある。科学の利器たるスマホでは、魔学にまでは対応できないだろう」

「へい、SiO₁」一番いい魔法を頼みますわ」

吹き荒れる嵐。しかし暴風はやはりモヒカンたちだけを吹き飛ばす。

「なっ……信じられん。陣の展開も無しに……これほどの風を……」

「知らないんですの？ 魔法はSiO₁から出るんですのよ」

「ぐ、ぐふっ。か、勝てるか……こんな……」

倒れるモヒカンたち。一応命に別状はない……はずである。

そして湧き上がる喝采。

おそらく、世界で最強の登場人物になれたのだろう。

森羅万象を操る能力がこのスマホとともにある限り、常識に囚われた有象無象共では相手にならない。

いや、ひよつとしたら大統一理論の完成すら、このスマホなら可能かもしれない。

いや、科学どころか、あらゆる哲学、宗教、魔法すらもスマホという真理に集約することが可能だろう。

真の万能とは、即ち神をも超えた能力である。

アリスは霊長の頂に立ったが、それは真理を探求する深淵ののどば口に立ったに過ぎないのである。

「道を究めた先にあるのは山の頂ではなく、無窮に広がる海原のようなもの……しかし、その全てがこの手のひらに収まっているのだとしたら。私が問うべき相手は節理そのものではなく、このスマホ自体だということになりますわね」

割れんばかりの喝采を、しかしアリスは遠いもののように感じる。

ヒトの求める力には際限がない。

より良いモノを求めるのは、人が生きていくための当然の本能である。

異様を感じ取った猫耳女がアリスの手を取る。

暖かく、柔らかい掌を爪が食い込むほどに強く握りしめると、彼女と自分の脈が解った。

骨と肉と血と。それは生命の証。その情報が、たまらなく尊く、故に好奇心は止まらない。

「どうしたの。アリスちゃん……泣いているの……？」

ああ、なんと生命の不思議な事か。曖昧な情報を連続しているだけの不安定な存在同士が、手を取り合い、助け合い、どこか狂気的な常識という信仰に縛られて生きている。

解き放ちたい。と思う。

人類には不可能であった事を成すには、ただ問えばいい。ただ答えを得ればいいだけなのだ。

「力に支配されてはならない。力に驕ってはならない。

ヒトは生存し、探究することでその価値を生みますわ。もつとも生物として基礎的で尊い行為は生殖ではありま

すが、残念ながら私の体は男性の機能を果たせるほどには成熟していません。そして、その時を待つことが出来るほど、私は気長でもありませんの」

ぼろぼろと、涙をながすアリスに、ついに群衆が気付く。

矢継ぎ早に優しい言葉が掛けられる。

その裏には、純粹な厚意があつて、そして取り入ろうという打算があつて、浅はかで、複雑で……故に余りにも愛おしい。

「大丈夫……すこし、嬉しいだけですわ。皆に認められること、そして皆を認めることがこれほどまでに胸が空くものだと、予想だにしていなかっただけですの」

……だから

「だから、私は問わねばならないのですわ。私は、識らなければなりませんわ。この世界の法則を……」

アリスは、スマホをタップする。

ふわりと漂ってきたオレンジの香りが、どうしようも

なく懐かしかった。

画面に読み込みを示すバーが表示される。

世界は、流転する。

そして、猫女はやさしく微笑んで、アリスの体をその柔らかな体へ抱き留める。

思わず、アリスはふき出してしまふ。

「なんだ。たったそれだけの理由でしたのね。なんて簡単で、愚かで……詰まる所私もまた、勘違いに行かされている、凡庸な人間に過ぎなかったと……」

そして――

世界の法則が観測され、虚構と現実の境界が取り払われる。

スマホという小さな釜の中で全て等しい情報として平滑化され、人類はここに真の平等を得る。

個と群という軛は無くなり、故に一切の犯罪も無く、しかし生は死によって謳歌され、幸福は不幸によっていや増す。

なにかが大きく変わった訳ではない。ただ、全ての情報が完全に並列になることで常識という概念そのものが消失した。

そしてヒトの過去の文化や哲学は記録上のモノとなり、

[Compile...]

[Please wait...]

[Rolling...]

[Rolling...]

[Rolling...]

ふと、アリスは思い出す。

「ああ、そういうえば……まだ君の名前を聴いておりませんでした」

ゆつくりと、猫女の口が動く。もう音は聞こえない。

だから、口の形だけで読み取る。

大きく口をあけての一音目。白い歯を見せての二音目。

すぼめた口先の三音目。

無限に発展し続ける文明という未来だけが茫漠と広がっている。

——スマホが床に落ちる音がする。

衝撃にガラスが割れ、半導体が損傷し、回路が短絡し、完全に機能を停止する。

未来の扉を開くカギは、もう必要がない。

次に行き当たる頃にはきつと、新しいガジェットがこの世に生まれ落ちている筈である。

我々の居る世界の殻の外には、何があるのだろうか。誰がいるのだろうか。

壊れている筈のスマホが、着信を知らせる。

アリスが通話ボタンを押すと、スピーカーからはかわいらしい女の子の声が出た。

『あなたはいったい誰ですの』

アリスは、子供らしい弾けるような笑い声をあげる。

ほら、真理なんてものはただの幻想で、私達は常に錯覚に囚われて生きている。だからこそ——

ヒトは二本の足で地に立ち、空いた両の掌で道具を作ってきた。やがては這う這うの体で空へと舞い上がり、それだけでは飽き足らず地球の外へすらも、その好奇心の裾野を広げてきた。

これからも、その胸に探求の灯が残る限り。心に夢を追う翼が生えている限り……ヒトはきつとどこまででも、往くのだろう。

[Please wait...]

[Now loading...]

[Now loading...]

[Now loading...]

[Complete.]

[—Close the world, open the next.]

[HAHAHAHAHA……]

火星冒険録 アリスちゃん

著者… ロッキー・ラックーン

まえがき

今回も「ハヤテ」以外からのキャラクターが登場しますので、ご紹介します。

「アリス・キャロル」:

今回の主人公。『ARIA』のキャラクター。15歳。「でっかい●●です」が口癖。史上初の飛び級での「一人前（プリマ）」昇格をした伝説の水先案内人（ウンディーネ）:。なのだが、今回は舟を漕ぐシーンは無し。バレンタインのチョコ作りをしたいと考えているが、料理が特別得意という訳ではないので、どうしようか悩んでいたところ:。アリスちゃんとの仲は、クリスマス合同本2014を参照。

「火星（アクア）」:

ARIAのストーリーの主な場所。字のとおり火星。テラフオーミングして人類が地球と同じように住めるようになる

ったという設定。アリスちゃん・ヒナギクは地球出身、アリス・キャロルちゃんは火星出身。設定としてはあんまり意味は無い。

「水先案内人（ウンディーネ）」:

ゴンドラと呼ばれる舟で町の観光案内を行う女性の職業。三つの階層があり、低い方から「見習い（ヘア）」・「半人前（シングル）」・「一人前（プリマ）」となる。ヒナギクがアイドル的な憧れを抱いている職業という設定。

「オレンジぶらねつと」:

アリスちゃんが所属するウンディーネの会社（＝水先案内店）。新興の業界最大手で、寮内の設備・食堂のメニューなどとても充実している。

「オムレッツライス」:

「カイジ」シリーズスピンオフ、「1日外出録ハンチョウ」1巻第3話に出てくる美味しそうなメニュー。詳細は本編…!:

【火星冒険録 アリスちゃん】

「わっつー憧れのオレンジぷらねっとの制服だわ……どう？ 似合うかしら？」

「ふーん、悪くないですわね」

「でっかい良いです。似合ってます、ヒナギクさん！」

こんばんは、アリス・キャロルです。今回のでっかいでっかい主役です。

明日はバレンタイン。それと同じく、でっかい尊敬する先輩のアテナさんのリサイタルがあります。日ごろの感謝の気持ちをチョコレートに込めて贈ろうと思っていたところに、火星（アクア）に来てくれたのはアーたんことアリスちゃんと、そのママのヒナギクさん。実はバレンタインのチョコ作りにでっかい悩んでいる話をしたら、二人で手伝ってくれるというありがたい展開になりました。

「わっつーすぐくオシヤレな建物ねーさすがは最大手のオレンジぷらねっつと」

「はしやぎ過ぎですわよヒナ。もっと慎ましくしなさいな」

「ふふっ……喜んでもらえてでっかい嬉しいです」

今日はお二人にはオレンジぷらねっとの寮にお泊りに来て貰ってます。もちろん寮長さんにでっかい許可を貰ったうえでのご招待です。ヒナギクさんは水先案内人（ウンディーネ）通らしく、この寮に訪れるのが憧れだったそうでも嬉しそうです。アーたんは落ち着いているように見えますが、髪の毛がぴよんぴよんと飛び跳ねます。やっぱりでっかい嬉しいだと思います。

「なんか……すぐ注目されてるような……。アリスさんの黄昏の姫君（オレンジプリンセス）のオーラってやつかしら？」

「いえ、でっかいアーたんのおかげです。こんなに可愛いらしい子が制服を着てればでっかい注目の的です。私も社歴が長くなってきたので、食堂にいるだけで物珍しいという存在ではなくなってきたと思います」

「エッヘンですわー！」

食堂で3人並んでいる所にでっかい注目を集めるのはアーたんです。なぜか都合良く用意されていた子供用の制服がよく似合ってます。通りかかる同僚の皆さんに話

しかけられて、アータンも得意げです。

そんなこんなで、夕食です。オレンジぶらねっこの自慢でもある食堂のメニューをお二人にも堪能して頂きます。

「ヒナは何にしましたの？」

「アリスさんが頼んでいた珍しいメニューを。…オムレツライスだっけ？」

「はい、でっかいオムレツライスです」

ヒナギクさんには私のでっかいお気に入りのおムレツライスをおすすめしました。オムライスではなく、オムレツの定食なのでオムレツライスです。

「オムレツに白いごはんなんて合うんですの？ちよつと信じられませんか」

「でっかい大丈夫です。ヒナギクさん、オムレツの中身を見てください」

「分かったわ。なるほどなるほど…このオムレツ…よく見ると…入っているわ。チャーシューと輪切りのネギが

たっぷり…！普通の洋食のオムレツには無い発想ね。味は…」

「美味しいっ…！しかもこのオムレツ…混ぜてあるわ…味覇（ウェイパー）…！」

「ケチャップが少なくて心配だったけど…これなら問題無し…！くう、進む…進むわ…白米（ライス）が…！」

ヒナギクさん、ものの数分でオムレツライスをペロリです。でっかい期待通りです。このオムレツライスは中華料理風でごはんにあう味付けをされています。寮内でも5本の指に入る人気メニューです。ヒナギクさんのコメントと食べっぷりに見とれて、自分の分が全然進んでいませんでした。

「アリスのメニューはやっぱり…」

「もちろん！大好物の焼きそばですわ。オレンジぶらねっこの焼きそばはどう攻めてくるのか気になりますわね」

「期待してもらってでっかい大丈夫かと思えます」



焼きそばも寮内の大人気メニューで、私もでっかいよく食べます。小さな口にこんなにも入るのかというほどの量のそばを頬張るアーたん。でっかい可愛らしいです。

「この食堂の焼きそば：かなり麺が太いですわね」

「ええ、地球（マンホーム）ででっかい流行りのスタイルにしたと料理長の方が言っていました」

「やはりこの焼きそば：味が濃いめですわ：！太い麺にしっかり絡むように：とろみも強め：このソース：！」

「はい、水先案内人（ウンディーネ）は舟を漕ぐでっかい肉体労働です。汗をよくかくので少ししよっぱい方がこの食堂では好まれてます。男性に見られてるわけでもないの、気取ったメニューより、しっかり食べられるメニューの方がでっかい人気です」

「なるほど納得ですわ。味は濃いものの、嬉しいのがこの目玉焼きですわ：！ソースの味をマイルドにするだけでなく：やはり高いですわね：栄養価：！体力勝負の水先案内人（ウンディーネ）さんの強い味方ですわね」

「そして特筆すべきは：このテーブルセット：！青海苔も鰹節もかけ放題ですわ：！逆を言えば、『かけたくないときはかけない』ことができる：！」

「はい、この食堂はランチでも焼きそばを扱ってます。

ランチ後の観光案内で水先案内人（ウンディーネ）が歯に青海苔をつけていようものならでっかい赤っ恥です。

一応ランチ後には歯を磨く習慣もあります、急いでるとちゃんとケア出来ない可能性もあります」

「そのあたりの配慮に抜かりなし：とどのつまりは接客業ですわね：！」

でっかい焼きそばが大好きなアーたん、食堂のメニューにもご満足頂けてなによりです。

さて、でっかい本題のチョコレート作りです。料理長のでっかいご厚意で、バレンタイン前日の今日は食堂の営業時間後にキッチンを開放して貰ってます。私たち以外にも楽しそうに料理に励む同僚の皆さんがちらほらといます。

「できたー！」

「も、もうできましたの？」

「終始サボってたわね、アリス」

「いえ、アーたんはでっかい見守ってくれました」

作るうえでの心構えとか、お砂糖の分量とか、最後に

大事なのはやっぱり愛情とか、でっかい省略をして出来てしまいました…チョコレートケーキ……さっそく味見をしてみます。

「…でっかい美味しいです！」

「やったわね、アリスさん！」

「はい！でっかいヒナギクさんのおかげです」

「どれどれ、私も味を見て差し上げますわ」

食べたくて堪らない様子を隠してるかのようなアーたんにもでっかいあーんをしてあげます。またまた小さい口で一生懸命に頬張る姿がでっかい可愛らしいです。

「生地部分はかなり濃厚なチョコレート感…それだけに甘さは控えめ…くわえてアクセント…このオレンジの薄切りのシロップ煮…チョコの甘みと合わさった複雑な旨みとなって舌に押し寄せてきますわ…！」

「まさに黄昏の姫君（オレンジプリンセス）が満を持して持つてくるチョコケーキにぴったりね……それにしてもさつきからB級料理マンガの解説っぽいセリフはなんなのかしら？」

「細かいところは気にしちゃダメですわ、ヒナ。トニカ

クオイシイ、それで良いのですわ！」



「これで明日はバッチリね」

「はい、でっかい準備万端です！」

「アテナさん、絶対喜んでくれますわ！ついでにハヤテも」

ケーキのラッピングも済んで、お風呂にも入り、あとは寝るだけ。明日がでっかい楽しみで、眠れないかもしれません。

次回…バレンタイン本番…でっかい乞うご期待です

…！

アリスのおでん

著者…雪月

“いや、何も家で食べることは無いか”

それは妄想だったのかもしれない。

あるいは幻覚でも見ていたのか。

荒唐無稽としか言いようのない、非現実じみた光景。

夢か現か幻か。

不思議で不可思議な一幕、はじまりはじまり。

寒い夜だった。

天気予報を信じるならば、週末には雪も降るといふ。

往来を行き交う人々も、気持ち足早で、どこか慌ただしい。

その喧噪に混じりながら、男は一人白い息を吐いた。

道行く人達には、早く帰る理由があるのだろう。

だが、自分には慌てて帰る理由は何もなかった。

帰っても家に待つ人はいない。

食事をして風呂に入って、後はせいぜい明日の準備をしておくぐらいか。

今日は少し仕事を終えるのが遅くなってしまった。
今から帰って食事の準備をするのは、流石に遅くなってしまうだろう。
そんな考えが頭に浮かぶと、つい視線が料理店の方に
向く。

こんな時間だ、どこも賑わっている。

たまには外食でもしてみようか。

少しの贅沢くらい文句も言われないだろう。

そう心に決め、どこか適当な店はないかと辺りを見回す。

“といっても……”

どこもかしこも満席……というわけではないが、見る限りにはどこも騒がしいように見えた。

騒がしいのが嫌いなわけではない。

だが、そこに混じるのはたまに良い。

それにただ食事をするだけだ、できれば静かな方が良
いと思う。

どうしても食べたい店があるのであれば、多少うるさくてもかまいはしないが、別にそういうわけでもない。

“何が良いかなあ”

そんな想いを抱きながら歩いて行くと、ふと思いがけないものに出会った。

屋台。

このあたりでは初めて見るもの。

古き良き、といって良いものかどうか。ただ、よく物語で見るとおでんの屋台だ。

のれんが下がり、5人も座れば満席になるような小さな屋台。

ただしこんな寒い日だ、店には誰も入っていない。

だが、不思議とソレが悪いことだと思えなくて、むしろそれでも良いんじゃないかとすら思える。

魅力的だ、運命的だと言っても良い。

“ここにしよう”

そう決めたら早かった。

男はまっすぐに屋台に向かい、のれんをかき分ける。

そして、そのあまりに異様な光景に、言葉を失うことになる。

「いらっしやいませ」

「!？」

いや、言葉だけではない、金縛りに遭ったかのように、体も完全に動作を止めた。

だがそうなるのも仕方ない、それほどまでに奇妙な光景なのだ。

なぜならば――

“こ、子ども？”

割烹着を着た金髪縦ロールの少女が、おでん屋台の店主をしている。

言葉にすればそれだけなのだが、それがどれほど異常なことか、理解できない人間はいないだろう。

「えっと……」

「……？ お客ではないのですか」

「いや、客のつもりなんだけど……ここは、えっと君の店、ってことでいいのかな」

「他に誰がいますの」

“ いないんですけどさあ…… ”

今日の前に映る光景が夢か何かであって欲しい。

そんな願いを込めた問いも、目の前の少女にいとも簡単に打ち砕かれた。

なんだコレは。

そんな言葉が頭の中を埋め尽くす。

「お客なら早くお座りなさいな、寒いでしょう」

「あ、ああ、すまない」

「飲み物は何が良いんです？」

「え、あ、あ……じゃあ、梅酒とかありますか？」

「ええ、ありますわよ」

“ あるんだ…… ”

流されるがままに、普通の店と同じように注文をして、何事もなく椅子に座る。

程なくして梅酒の注がれたグラスが目の前に置かれ、少女は鍋に視線を戻す。

特に何も言わなかったが、ロックにしてくれたらしい。口をつけると、芳醇な梅の香りが口の中に広がった。

“ ……何か思ってたのと違う！ ”

そのほとんどが想像通りだったのだが、ある一部分が決定的に違う。

たった一部分ではあるが、その一部分の違和感が大きすぎる。

人は予想外のことが起こると弱いものだ。

平常心を失ってしまうと、自分の求めていたものが何だったのかすら忘れてしまう。

そもそも自分は何のためにのれんをくぐったのか。
食事だ。

食事を取るためだ。

そうだ、ご飯を食べるだけなら店主が少女だろうと関係ないではないか。

心を落ち着かせるんだ。

“そうだ、目の前の存在に惑わされるな”

ここはおでん屋、ここはおでん屋。

衝撃的すぎて忘れかけるが、それだけは間違いないはず。

ならばするべき事は一つ。

「大根とちくわを下さい」

「承りましたわ」

この店の料理を楽しむことだけである。

ただし一つだけ不安なことがある。

味だ。

果たして目の前の少女が作った(であろう)おでんが

美味いかどうかだ。

もつとも、よほどのことが無い限りおでんをマズく作ることは難しいと思うのだが。

それでも今目の前に映る状況はよほどの事が起こりうる……というより、何が起こってもおかしくない程の規格外の状況なのだ。

不安を持つことは仕方の無いことだ。

「……」

心持ちは完全に無である。

余計なことを考えるよりもよほど精神衛生上健全なはずだ。

「おまちどおさま」

そして運命の一皿が目の前に置かれる。

見た目は普通だ、もちろんこの時点で奇抜だとしたら困るわけだが。

ただ、匂いは良い。

これだけでかなりの不安は解消される。

匂いは良いのに味が極端に悪いなんて事はまず考えら

れないからだ。

“それに柔らかい”

大根に箸を入れると、わずかな抵抗を感じた後にスツと二つに割れた。

柔らかく、それでいて型崩れもしていない。

それだけで美味しそうだ。

「いただきます」

そう言葉を発すると、間髪を入れず大根を口に運んだ。美味い。

一言で言うならば美味しいおでんだ。

劇的に美味しいわけではない。取り立てて際立った味の特徴があるわけでもない。

それでも、求めていたのはこの味だ。

落ち着く味、とでも言えば良いか。

食べるまでに感じていた不安が一気に吹き飛ぶ。

「美味しいよ」

笑みをこぼしながら少女に声をかける。

その言葉に少女はほほえみで返した。

うん、ここは良い店だ。

そのことにわずかな満足感を感じる。

そうして次はちくわを食べようかと箸をのばしたとき、少女がジツとこちらを見ていることに気がついた。

「……？ 何か？」

「ああ、失礼致しましたわ」

別に不快に感じたわけではない。それでも気にはなるものだ。

「ただ単に、うちに来るには珍しい客だな。と思っただけですから」

「珍しい？」

「ええ」

少女が店主をしている珍しい店から珍しいと言われる

とは。

内心でそう苦笑し、何が珍しいのかを訪ねる。

「ここに来るお客の大体が、何かしら悩みを抱えている方ばかりでしたから」

「悩み、ねえ……」

そんなことを急に言われても思いつくものでもない。大体悩みがあったとして目の前の少女に話せば良いのか。

“ソレはどちらかと言えば罰ゲームのたぐいじゃないのかなあ”

そんな思いが拭えない。

「そんなに悩み相談される事が多いんですか」

「相談……というか、食べに来た人が勝手に話してくる事が多いですわね」

要は鬱憤晴らしの相手にされることが多いと言うことか。

子どもにそんなことをするなんてずいぶんと度胸があるな、という気もするが、むしろ何の関係もない子どもにだからこそ話せることもあるのかもしれない。

……もつとも、それに付き合わされる側の彼女はたまたつたものでもない気がするが。

「そんな愚痴に付き合うのも店主の役目、ですわ」

なるほど、そういうモノか。

「しかし、正直特に差し迫った悩みというものは無いですわね」

探そうと思えばあるのだろう。流石に何の悩みがないと言えるほど脳天気生きているつもりはない。

だが、日がな一日を費やすような深い悩みなんて思いつかないし、特に何か困っていることもない。

ましてや悩みのないことが悩み、等と言葉遊びをするつもりもない。

「なら、それはそれで良いことですわ」

悩みなんて無理に思いつくものでもありませんし。

その言葉を聞いて、確かにそうだと思う。

「何気ない日常の中に、ちょっとしたアクセントはあっても良いと思いますけれど、一番大切なのは普通の日常ですからね」

悩みがあるかないかという話だったのに、ずいぶんと大きな話になったものだ。

だけれども、少女の言葉はある意味で真理なのだろう。刺激的なものに憧れることはあるけれど、そればかりでは疲れてしまう。

そういうモノはたまにだから良いのだ。

今日のようなほんの少しの贅沢も、いつもの日常を過ごす上でのちょっとした思い出になるのだろう。

明日も、そのまた明日も日常は続く。

だから今は、ほんの少しの非日常を楽しんでいよう。

“……いや、ほんの少しどころか、とんでもない非日常
なんだけど”

そんな内心のツツコミは、誰にも届くことなく男の中に渦巻いていた。

-fin-

二等分の花嫁

著者…双剣士

ミコノス島でハヤテと別れた後、三千院帝の策略により十年分の年齢と記憶を封印された天王州アテネ。

封印解除を早めるにはハヤテたちの住むパワースポットとヒナギクの持つ妖刀・白桜が必要と聞き、とある王家の姫「アリス」の修行の旅だと称してゆかりちゃんハウスでヒナギクたちとの同居生活を始めたのが五月の半ば。

修行といっても特にすることがある訳でなし、のんびり朝寝坊とお昼寝をしながらハヤテたちのラブコメな日々を一步引いた立場から眺めていた彼女であったが…
…それでも半年近くも同じ部屋で暮らせば、それなりに情も移るといふものである。

「で、いつになったらハヤテに告白しますの？」

「ちょよ、ちょよ、なによいきなり！」

入浴を終えて今夜の勉強に取り掛かろうとした桂ヒナギクに、ドSなお姫様は手加減なしの剛速球を投げ込ん

だ。

「余計なことは言わずに今日まで来ましたけれど、さすがに情けなさすぎて見ていられませんわ。ハヤテのこのと、このままただのクラスメートで終わっていいと思っ
ていますの？」

「え、いや、私はそんな、ハヤテ君のことなんて別に…」

「あなたも気づいているのでしょ？ 一緒に暮らして想いのひとつも伝わらないなら、あなたの恋心は永久にハヤテには気づかれませんわ」

もはやこれが恋かどうかを論じている段階じゃない。それは本人にも自覚のあることらしく、ヒナギクは赤い顔をしながら口をつぐんだ。

「これだけ魅力的な女の子たちに囲まれて暮らしていて、アイドルの子からも想いを寄せられる天然ジゴロが相手ですわよ。あちらからのアクションを待っていて勝算があると思ってる？」

「で、でも、自分から好きとか言うなんて…：…なんか負けた気がして悔しいじゃない」

「なんですの、その子供理論は。だいたいあなたは機が熟するのを待つようなタイプじゃないでしょ？ 好きなら好きでウジウジせずに、真正面からガブーツと食らい

ついてしまえばよろしいのに」

乙女の逡巡もアリスにかかれれば一刀両断である。

「そもそも私を知るだけでも、肩こりマッサージ事件、風邪ひきお嬢さまごっこ、無人島でのカレー探し、こないだの修学旅行と美味しいイベント目白押しだったじゃありませんの。あなた今まで何をしていましたの？」

「うっ……」

読者の声を代弁したかのような容赦のない連続攻撃に、無敵の生徒会長もタジタジ。ヒナギクとて努力はしたのだ、甘えてみたり遠回しに告白したり雪山の山小屋で好きな女の子のタイプを聞いたりと頑張っては見たのだ……その全てが豪快に空振っているというだけで。だがそんなことを目の前のお姫様に言い返さうものなら、より視線が冷たくなるのは火を見るより明らか。

「もう、なんでこの子にここまで言われなきゃならないわけ？」

自分の情けなさを正視できなくなったヒナギクの思考が、八つ当たりの方向へと走り始める。そもそもあの時から歯車が狂ったのだ。恥ずかしいのを押し殺して全身全霊の告白をしかけたあの夜、ハヤテがあんなことを言わなければ……目の前のお姫様と瓜二つの、あの綺麗な女性のことを好きだなんて言わなければ！

「……だって、しょうがないじゃない！ ハヤテ君は天王州さんのことが好きだったんだもの！ あの人のためにあんなに傷だらけになって戦ったんだもの！ あのあとすぐに二人は別れたって言ってたけど納得できるわけないじゃない！ ハヤテ君の笑顔の裏にどんな想いが籠もっているかって想像したら、全力でぶつかるとか来っこないじゃない！」

「……天王州さん、ですって？」

まさかここで自分の本名が出てくると思わなかったアリスは、攻撃を中止して聞き役へとシフトチェンジしたのだった。

それからしばらくして。貝のように布団を頭からかぶって寝入ってしまったヒナギクの部屋の押し入れで、アリスは彼女から聞かされた話を反芻していた。幼いころに王族の力を使った時以降の記憶を失っているアリスは、当然ながらハヤテとの思い出も無くしている。ヒナギクから聞いた話は断片的ではあるものの、その間の自分とハヤテの関係と互いの思いを推しはかるには十分なものであった。

二等分の



花

嫁

だが未来の自分の行為を聞かされたアリスの脳裏に浮かんだのは、感動でも同情でも憐憫でもなかった。

《未来の私は、アホですの？》

困難と強敵を乗り越えて固く抱きしめ合った、互いに想い合う男女二人。どう考えてもHAPPY ENDへ一直線になるはずなのに自らそれを放棄したという未来の自分の気持ちだが、アリスには欠片も理解できなかった。もし本当ならヒナギクをヘタレ呼ばわりしたのが申し訳なくなるレベルのヘタレクイーンとしか思えない。自分の将来がそうだと信じるには抵抗がありすぎた。

《ま、信じられないヘタレになってしまったからこそ、お爺さまの策略にコロツと引っかかったのでしょうかね》

未来の自分を容赦なくデイスって心の平静を取り戻したアリスは、そのままস্যスヤと夢の国へと旅立ったのだった。



「というわけで、なぜそうなったか教えなさいですの」「えっ、えっ、何これ？ なにが起こってるんですの？」
小さなアリスは白い靄に囲まれた空間で、未来の自分

……恥ずかしいドレスを着た天王州アテネと対峙していた。

「は、恥ずかしくありませんわ！」

「やれやれ、十年たつと私のセンスはここまで劣化してしまふものですよのね」

アリスの舌鋒は鋭さを増す一方だった。そもそも相手は自分なのだ、遠慮する必要など微塵もない。

「こうして話せる機会も滅多にないでしょうからね。グズグズしないで教えなさいですよ」

「お、王族の力の秘密なら、ネタバレになってしまいますからここでは……」

「もう本編は完結してるんですから問題ありませんわ……じゃなくて！ 聞きたいのはハヤテとあなたとの関係ですわよ！」

キャラ視点の逃げ口上をメタ発言で叩き潰すアリス。だが本題に入った途端、十年後のアリスの表情に余裕が戻った。

「あらあら、そんなことが気になりますの？ お・ま・せ・さ・ん」

「ちよ、前髪を突かないでくださいまし！」

「あなただって半年近く彼と一緒に暮らしているんですよ。彼が悪い人じゃないことは知っているでしょうに」

天王州アテネは明らかにはぐらかしに入っている。アホ毛をガードしながらアリスは慎重に戦略を組み立てた。ヒナギクから聞いた話は大事な切り札である、使いどころを見極めないと。

「彼が執事として有能であることは認めますわ。でも私が聞きたいのはそういうことではなくて……」

「彼と同じ家に住んで、毎日ご飯を作ってもらって、思う存分遊んでもらって……羨ましいわ、あなたが」

「だぁぁーっ、私のことはどうでもいいんですのよ！」

「どうでもよくはないわ。私はあなたなんですから」

あくまで主導権を手放さないアテネ。五歳児の会話でこの流れを変えるのは無理だと感じたアリスは、五歳児らしい武器……駄々っ子モードを発動した。

「ずるいですわ、不公平ですわ、アンフェアですわよ！あなたはハヤテとの思い出が沢山あるのに、私には何にもないなんて！」

「思い出なんかより今の方が何倍も大切……」

「上から視線はもう沢山ですわ、巨乳露出女！」

「ちよ、人を見た感じで呼ぶのやめてくださる?!」

「お黙りなさい、化けチチ縦ロール女！」

「なっ……バカにするのもいい加減にしてくださいる?!」

こうして文字にできない自分同士の罵詈雑言合戦が展

開された。だが自分相手に全力を振り絞ったところで決着がつくはずもない。やがて二人は荒い息をつきながら床に両手と膝をつき……しばしの沈黙の後に年長者の側が折れてきた。

「はぁ、はぁ……それで、何を聞きたいんですの……?」

「で、ですから、あなたとハヤテとの関係を……」

「私とハヤテは色々ありましたけど、もう終わったことですよ。そんなことより、これからのあなたたちの方が……」

「終わってなんかいませんわ！ハヤテは明らかにあなたとの別れを引きずっているし、そのことで迷惑をこうむっている子もいるんですから！」

ようやく自分のターンが回ってきたと感じたアリスは一気呵成に攻め込んだ。対するアテネはきよとんと眼を丸くした後、疲れ切ったように脱力して溜め息をついた。「迷惑をつて……そうでしたの。彼の重荷になりたくなくて別れたはずだったのに、そう簡単には行かなかつたんですのね」

その後。アテネはアリスに向かって、ハヤテとの思い出を語ってくれた。ロイヤルガーデンでの出来事、白皇

学院に入学してきたときの気持ち、ミコノス島で再会した後の揺れる気持ちを切々と……。

しかし。

「途中経過はもういいですわ。要するにハヤテが好きなんですの、嫌いなんですの？」

「で、ですから、好きだけど彼のそばには居ちゃいけないと思ったというか……」

「はあ？ 自分がどれだけ矛盾したことを言ってるか判っていますの？」

残念なことに、恋情あふれまくりのアテネの口から語られる物語は五歳児の脳みその処理能力をはるかに超えていたし、恋愛経験というベースのない幼女に共感できるはずもなかった。好きなら追いかけてくっつく、嫌いならそっぽを向く。アリスに理解できるのは高々そんなレベルである。

「イエスカノーかで答えてくださいませ。ハヤテはあなたのことを好き、イエス？ ノー？」

「……イエス」

「未来の私はハヤテのことを好き、イエス？」

「イ、イエス」

「その二人がドラマティックに再会しました。互いの気持ちも知っています。こうなったら目指すは二人のハッ

ピーエンド。イエス？」

「……一般論としては、イエス。でも……」

「デモもヘチマもありませんわよ！ そこで素直になればみんなハッピーになれて、ヒナギクさんも諦めが付きましたのに！」

「ヒナギクさん？ ああ、あの子のことですわね。良くも悪くも真っ正直に最短距離を歩くタイプの子でしたわ。そう、あの子がハヤテのことを……」

「だああーっ、だからその上から視線をやめなさいと言っていますの！」

じたばたするアリスに対してアテネは沈黙を守った。ハヤテの心の奥には既にナギさんが住んでいるから……ナギのアパートで楽しく暮らしている小さな自分の分身に対して、それだけは明かすわけには行かなかったのである。彼女がヒナギクに肩入れしていると聞いては尚更。

「まあ、いいですわ。理解も納得もできませんけど、事情があったことはわかりました」

小さなアリスが追及をあきらめてくれて、アテネは心の底からほっとした。だが続く発言をスルーすることはできなかつた。

「どうせ私は、未来の私が復活するまでの仮の姿ですもの。あなたたちの複雑な事情を理解できなくて当然ですわ。これまで通り舞台の下から、ヒナギクさんや歩さんにエールを送ることにしますわよ」

「舞台の下って……何を言っていますの？ あなただつてあのアパートの、かけがえのない一員でしょう？」

「ハヤテは私じゃなくて、私の中にいるあなたを見ているんですものね。ハヤテが優しく面倒を見てくれるのも、きつとそのせいなんですわ。もしかしたらハヤテがヒナギクさんたちになびかないのも、私が居ることで中途半端に未来の私を思い出してしまうせいなのかも……」

小さな自分が拗ねている。自分は邪魔者に過ぎないんじゃないかといじけている。そんな思いをさせるためにハヤテとの思い出を話したわけじゃない……アテネは両手を広げて、小さく震えるアリスの背中を抱きしめた。

「最初に言ったでしょう？ 私はあなたが羨ましいんですのよ。ハヤテのすぐそばで暮らせて、これからも一緒に思い出を作っていけるあなたが」

「そんなの、ただの時間つぶしでしかありませんわ。封印が解けて未来の私が戻ってきたら、今の私は居なくなるんですから」

「もしかしてあなた、今のあなたと未来のあなたが別人

だとも思っているの？」

え、と小さく口を開けたアリスの真正面にアテネは移動して、小さな自分の瞳をじつと覗き込んだ。

「居なくなったりなんかしませんわ。いずれ力と年齢と記憶は戻ってきますけど、それで今のあなたが消えたりなんてしません。あなたはアテネとアリスの両方の記憶を引き継いだまま、その後のハヤテやヒナギクさんたちと一緒に暮らすことになるのよ」

「な、なんでそんなことが言えますの？」

「夏の無人島で少しの間だけ、私が復活したことがあったでしょう？」

幼い自分にもわかるよう丁寧に説明するアテネ。ゲージが満杯になって十七歳の姿に戻ったとき、それまでの記憶を失って『自分がなぜこの島にいるのか』に戸惑うようなことは無かったこと。再び子供の姿に戻ったときも、無人島に來た目的や連れ合いの存在を忘れるようなことは無かったこと。あのときアリスは自分の中の別人と入れ替わる感覚だったかもしれないが、アテネからすれば十年前の記憶とイクサと話した時の記憶だけが出たり消えたりしただけで、別人とバトンタッチした感覚は全くなかったこと。

「ね、ですから、封印された期間以外の記憶は、変身す

る前も後も変わりは無かったの。あなたは仮の姿なんかじゃなくて、ちょっとした間だけ記憶と身体をどこかに預けているだけの、天王州アテネそのものだったのよ」

沈んでいたアリスの表情が徐々に明るくなっていく。

自分はいなくなったりしないんだ、記憶が戻った後もアパートの仲間たちと一緒にいいんだ……それは確かな福音として、アリスの小さなハートを優しく揺らしていた。

「もしハヤテと別れる前まで戻れるなら、今度こそ彼を離さないつもりでしたけど……そううまくは行かないようですわね。後は頼みましたわよ、相棒さん」

「……うん！」

艶やかにウインクしたアテネに向かってアリスは元気よく応えた。十七歳相当の身体に戻ったら、ヒナギクを「ママ」と呼んで一緒に暮らすことはさすがに出来なくなるだろうけど……今それは言わぬが花であろう。



「ん……」

翌朝……をとくに通り過ぎたお昼前に、小さなアリスはようやく目が覚めた。枕もとの時計が指すのは午前

十二時の七分前。食堂へと人が集まる気配がかすかに伝わってくる。

「……なんか、長い夢を見ていたような気がしますわ……」

とても複雑で、悲しくて、でも優しい夢を見ていた気がする。残念なことにアリスはその大半を目覚めた瞬間に忘れてしまっていた。アリスが覚えているのは二つだけ、誰かにかけられたエールの声と、同じくらい真剣に投げかけられた忠告の声。

「なんか、大事なことを言われた気がするんですけど……」

「アリスー、起きてるならお昼ご飯に来なさい！」
思い出せないものは仕方ない。厳しくも温かい「ママ」に手を引かれて、小さなアリスはもそもそと押し入れから這い出したのだった。

そして、昼食の席にはアリスの大好物が載せられていた。

「今日は肉まんをふかしましたよ」

「やったー、肉まんだー♪」

「ハヤテ君の肉まん、美味しいんだよね♪」

有能なメイドさんの手で各人一つずつ配られる肉まん。その湯気と匂いがアリスの食欲中枢を刺激する。ところが小さな口でフーフーしながら肉まんを頬張ろうとした、まさにその瞬間……夢の中のセリフが鮮明に蘇ってきた。

『年齢と記憶は戻りませんが、

体型まで戻るとは限りませんわ。

あなたの未来があなたのものである以上、

どんな姿の大人になるかはあなた次第。

運動もせずに食べたり寝たりを繰り返す生活は、

少し改めたほうがよろしくてよ』

「ハヤテ君の肉まん美味しすぎて、つい食べ過ぎちゃうんだよね〜」

「平気よ、食べた分はトレーニングで消費すればいいんだから」

「ヒナ、食べるときぐらいダンベルを離したらどうだ？」

「カユラ、お前はもっと肉をつけた方がいいと思うぞ」

アパートの住人たちが騒々しくも楽しそうに語らう中、アリスは口を大きく開けた姿勢で硬直し……そっと肉まんを皿へと戻すのだった。だがそんな『らしくない』行動を、ここの住人たちが見逃すはずもない。

「お、どうしたんだちっこいの。お前これ好物だっただろ？」

「どうしたのアーたん、起きたばかりでお腹すいてない？」

「アリスちゃんが頬張るのはちよつと難しかったですかね。少し小さめに切ってきてあげますわ」

世話焼きどもがやいのやいのと騒ぎ出し、数分後に一口サイズの肉まん数個が自分の前に並べられる。アリスの中では天使と悪魔が激しいバトルを繰り返していた。美味しいんだから遠慮せず食べちゃえという悪魔と、ひとつでも手を付けたら止められなくなるとブレーキを踏み続ける天使。そしてアリスを注視するアパートの面々は、一人残らず悪魔サイドであった。

「ねえアーたん、どうしたの？ 肉まん嫌いになっちゃった？」

「どうしたちっこいの、お前が食べないなら私が食べちゃうぞ」

「いけませんよナギ、小さい子からおかずを失敬するよ。うな真似をしちゃ」

「どうしたのかな？ アリスちゃんはまだ、ダイエツトとか考えなくていいと思うよ？」

「ほらほら、好きなものは迷わずガブーツと行けて、

昨日言ってたんじゃなかったの？」

ヒナギクの発言がブーメランとなってアリスの背中に突き刺さる。退路を完全に封じられたアリスは心の中で必死に言い訳をした。なにも絶食する必要はありませんわ、必要以上に食べなければいだけですもの。仮に食べ過ぎたとしても、ヒナギクさんみたいに運動すればセーフですわセーフ。大丈夫、大丈夫、これくらいなら大丈夫……。

「(もぐもぐ)……う、うんまーいですわー!!」

だが肉まんの味覚と熱気が口腔を満たした瞬間、押し寄せる幸福感が全てのモヤモヤを吹き飛ばした。アリスは食欲の赴くまま次々と肉まんを口へと運び、その幸せそうな表情に動かされた周りのみんなが譲ってくれる分まで胃袋に放り込み……そして全身ホカホカ状態のまま、お日様の下でのお昼寝体制に入るのであった。

その後。初柴ヒスイの館で本来の姿に戻った天王州アテネは、突如として現れた姫神葵の前に完敗を喫する。

その敗因のひとつが、黒いドレスによってギュウギュウに締め付けられたウエストの圧迫感だったことは、健全な少年誌には決して描けない秘密である。

F i n .

著者あとがき & メッセージ

【ピーすけさん】

ぶっちゃけ色々ケンカ売ってしまった気がします。言い訳も反省もしません。正直すみませんでした。

【ロッキー・ラックーンさん】

バレンティン合同本の刊行、おめでとうございます。

そしてまずは、すまぬ…すまぬ…。完全に納期がアレしてしまったので無理矢理まとめにかからせて頂きました。

次回のバレンタインではしっかり続きを書きます。きつと！

さて内容について。今回は「食べ物」と「アリスちゃん」という二つのルールがあったのでどうしようしようと考えて結果、美味しそうに食べてばかりの「1日外出録ハンチョウ」のネタを拝借させて頂きました。そして感じたのが、意外と難しい…福本的倒置法…！

最後に、素敵なイラストを描いていただきましたPすけさん、いつもありがとうございます。お礼になんでもしてあげたいですね。

最後の最後、唐突に今年目標。小説板で1話は更新する！（出来るとは言っていない）

【雪月さん】

のれんをくぐったらそこはアリスちゃんが店主の店だった。
今回決定したお題を見た時に最初に思いついたのがソレでした。

このことをアリスちゃん第一人者のロッキーさんにお話ししたところ「シニールですね」とのお言葉をいただきました。
はい、自分でもそう思います。

そんなところからスタートした今回の物語でしたが、場面一つ思い浮かんだからといって、それだけでお話なんて描けません。

そう思いつつ、物語を膨らませられるかどうかを考えてみた結果、それなりに話がまとまり「うわ、何か形になってるよ……」となってしまうました。

はつきり言って、思いつくと思いませんでした。はい。

しかし、実際に書いてみるとやはり状況がシニールすぎるためか全くとりとめのないものに。
正直、最初に考えていたプロットとまるで違います。

まあコレは、思いついたのが締め切りギリギリで、物語を深く描いていくだけの時間が無かったためでもあるのですが、それ抜きにしてもやはり状況が謎すぎる。

物語中、男がずいぶん動揺していますが、あれは作者である自分の動揺と言っても過言ではありません。
それどころか作者である自分の方が動揺している可能性すら有ります。

そんな作者の頭の中すら「？」で埋め尽くした今回の作品、少しでも皆様の喜びとなれば幸いです。
雪月でした。

私はSSのプロットを仮組みした後、それが「ハヤテのごとく！」原作と矛盾していないかを逐一確認することになっています（その結果としてプロットを組み替えたことも多々）。これまでではクイズを作れる程度には頭の中に原作がイメージ保存されていたため大きな矛盾が見つかることは少なかったのですが、さすがに完結から約一年半も経つと細部を色々忘れていたもの。気が付けば原作32巻く52巻をほぼ通して読み返す羽目になりました。

「あれ、ハヤテのごとくってこんなに面白かったっけ？ 残念ながら絵は下手になっていくけど……」

今更ながら認識を新たにした感じですね。連載を追っていた頃は「こういう展開が来たら嬉しい、逆にこういうのはハズレ」みたいな気持ちがあったんですが、フラットな視線で読み直してみると感じるものがまるで違う。キャラへの執着が少ないからストーリーや王玉の謎の構造が浮き彫りになるし、三千院帝や法仙夜空がそれぞれの時点で何を狙っているかもおぼろげながら見えてくる気がします。その一方でストーリーの枠外に居る瀬川泉ちゃんや日比野文ちゃんの清涼剤っぷりが際立って見えたりもしますし……後からファンになった人ってこういう見え方をしているのかなって新鮮な気分になりました。

今回の作品はそんな感慨もあって、タイトルをチャットルームのアンケートで決めた当時とは全然違うストーリーになってしまった次第です。挿絵イラストをいただいた後になって巨大修正がかかったため本気で焦りました。結果として「どこが二等分なんだ」とか「勉強シーンやラブシーンはどこに行った」とか「円盤皇女をオマージュするんじゃないかったんかい」等々、突っ込みどころ満載のSSになってしまいました。どうもすみません。

編集後記

止まり木の管理終了宣言と最後の合同本を出したのが一昨年10月。チャットログ保管以外は何もしないつもりだったのですが、余った時間を投入する予定だった他ジャンル向けSSの執筆がなぜか進まず、気が付くとジュリエットのTVアニメも終わってしまいました。これは何かのきっかけがないとズルズル行きかねないぞ……という百パーセント個人的な事情を背景にして、久々の合同本企画を立ち上げてみることにした次第です。

昨年末にいきなり言われたので時間が作れなかった方、執筆スタイルを取り戻せなかった方、思ったより時間がかかって締め切りに間に合わなかった方……いろんな悲喜こもごもが今回の企画の陰にはあったのだろうとお察しします。次の機会があるかは正直分かりません。リベンジを果たしたい方は、ぜひご自分で責任者に手を上げてください。ちなみに今回のテーマは新春ゲーム大会の上位者に決めてもらいましたが、もし私がトップ2に残っていたら「トニカクワイイのキャラを最低1名出すこと」を条件にして、当サイトのトニカク系コンテンツの先駆けにするつもりでした。その意味では私もやり残しがあることになりましたね。ちーちゃん可愛いよちーちゃん。

奥付

書名…ひなゆめファンの止まり木・バレンタイン合同本 2019

発行責任者…双剣士 (<http://soukenshi.net/mail/>)

発行日…2019年2月14日